第51号　50円
昭和52年11月25日

内　容

偶感……1
"二つの建築"が姿を見せる……2
新入生が「学生になる」条件……4
グラフに見る人と行事……7
第11回会員校事務連絡会……9
リユニオン・セミナー……10
大塚久雄先生の講演から……11
館長日記から……13
寄付金報告……2　千人会……3
事業部だより…12　利用状況…13

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
<所在地>
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話 0426-76-8511～3
振替口座 東京 74590番
<東京事務所>
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京 (241) 3961
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

偶感

理事長・千葉大学名誉教授
川喜田愛郎

一仕事区切りをつけて、丸谷才一氏の『文章読本』という新刊の書物を読んでいるうち、次の一齣にきてハッとして立ちどまった。

「本当に相手に信じさせなくちゃならないものは、結論の妥当ではかならずしもない。相手がこちらの結論を真(ま)に受けようと、受けまいと、最終的にはどうでもいい。信じてもらはなくちゃならないのは(さうでないと困るのは)、結論ではなく、そのことを述べてゐる人間そのものである。つまり、この文章を書いてゐる人間は信用できる、まともな奴だ、馬鹿ぢやない——言つてゐることには反対だけれど、といふ反応でもまあ差支へない。差支へないとしなくちゃならない。すくなくともわたしはさういふ気持で文章を書くことにしてゐるし、そして敢へて言へば、この種の反応を得ることだつて存外むづかしいのだ。」

(ここで読者のわたくしは一息入れざるをえない。)

「これはずいぶん寂しい諦めのやうに聞えるかもしれないが、しかし実は大事な覚悟である。」(以下割愛)

本の全容の紹介も試みずに、コンテキストから切り離した一節をとりあげて勝手な感想を述べるのは、著者に対してまことに失礼な話だし(丸谷さん御免なさい)、現にそのすぐあとにも

「誤解を避けるために断つておけば、わたしはこれを誠実主義的な人間の問題として述べてゐるのではない」という微塵も甘えのない言葉がみえて、それに続く勁い文章にこの著者の骨組みの逞しさがうかがわれるのだが、残念ながらここでそれを詳しく伝える紙面がどうやらなさそうである。

紙面がない、と言った口の下で、わたくしは惜しみなくその乏しい紙面を、この書物のずっととんでしめくくりの言葉でうめる。

「石川(現筆者註、石川淳「無法書話」という文章の一節)がここで語つてゐるのは、書くに価する内容がなければ字を書いてはいけないといふことである。この教訓は、文章においてさらによく当てはまるだらう。すなはち、記すに価することがあつてはじめて筆をとれ。書くべきこと、語るべきことがあるとき、言葉は力強く流れるだらう。これこそは人間の精神と文章との極めて自然な関係にほかならない。」

それを手前にひきよせて、わたくしはいまこう考える。

それぞれ異る専門をもち、孤独な作業の場で蓄えられた語るべき言葉をもった人たちが心を開いてこの丘に集まってきて、言葉がそこで力強く流れ、それらが一つの大きな流れに注ぎこむ気配をみせたとき、わたくしがこれまでひそかに描いていたセミナー・ハウスの理想の姿がほぼ半ば成就される。

ここでわたくしは上記引用の前半によりかかって考える。

言えば当然のことながら、みずから語っている言葉に誤りなきを期することは誰にも許されないだろう。もとより、正しい、妥当であると思えばこそ、むきになって語りもするはずだが、しかし、まちがっているかもしれない、少なくともそれが一面的な、あるいは自分ではそれまで明晰な意識をもたなかった特定の視座、時代、ないしは次元に窮屈に縛りつけられたものであるかもしれない可能性をいつも十分広くゆるさないかぎり、いささか青くさい表現でそれを言いかえれば、真理の前に人の精神がつねに開かれて謙抑でないかぎり、学問の場はなりたたないとわたくしは考える。「しかし実は大事な覚悟である」という開き直った言葉を転調しておよそそうした意味にうけとっても、たぶんそれほど大きな見当違いではないだろう。文学がそうであるといま教えられたように、学問も、一見非情な科学でさえも、わたくしの了解するところでは人間から離れた話ではありえないからである。おおむねその辺にあの「大学問題」という根の深く、そしてもつれた難問の大切なイッシュの一つがあったこと、そしてそれがいまもわれわれの宿題の一つであることはあらためて言うまでもない。

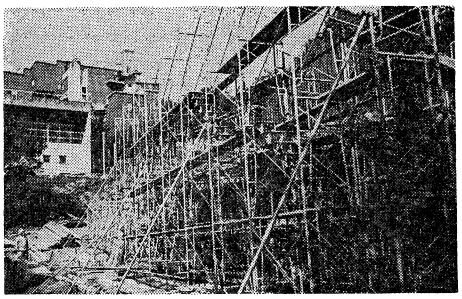
実を言えば、この場所でわたくしの編集部から頂戴した題——何を書いてもいいがというゆきとどいた条件つきではあったが——は、「巻頭論文、近代医学の諸問題——分化と総合(仮題)」というまことに大袈裟なものであった。たしかにそれはわたくしの拙い表芸でもあるし、与えられたその題を少々モディファイすれば、いまわたくしがそれこそむきになって語りたい話題の一つ——医学というキメラのような、しかも屈折した性格をもつ学問をめぐって温めてきた愚見についてさまざまな角度からの批判をうけ教えを乞いたい気持に動かされて——でもあるには相違ないのだが、その前に一つみずから確かめておきたい手続のあったことを、たまたま手にした畏敬するこの文学者の近業によって思い出すことができたのである。もとよりこの小文は、その密度の高く、しかも絢爛たる書物の、わたくしなりの「勝手読み」にすぎない。

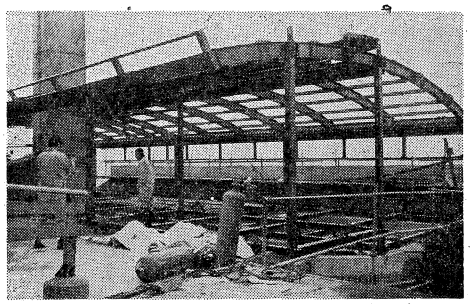
開館十周年記念事業

〃二つの建築〃が姿を見せる

募金も進捗して峠を越す

昭和50年の開館十周年から開始された「四つの建築計画」を含む記念事業は、その第一段階を昭和50年3月竣工の「大学院セミナー館」の完成で終了、現在、第二段階として、既報のとおり、「国際セミナー館」と「交友館」の建築にはいった。現在進行中の記念事業募金および建築工事の進捗状況を報告する。なお、十周年記念事業は、第三段階としての「国際シンポジウム・ハウス」の建築をもって完了するが、これは募金を継続して、来年度以降のプロジェクトとなる。





外郭を現わした国際セミナー館（上）と交友館（下）

▼募金進捗状況

二億円を目標とする開館十周年記念募金は、その後も財界の理解と協力を得て、順調に進み、目標の七割に近づいた。

現在までに応募された経済団体・個別企業は次のとおりである。

【経済団体】東京銀行協会、日本鉄鋼連盟、電気事業連合会、日本貿易会、全国地方銀行協会、東証正会員協会、日本建設業団体連合会、日本瓦斯協会、生命保険協会、信託協会、日本民営鉄道協会、日本損害保険協会

【個別企業】三井銀行、日産自動車、東京芝浦電気、日立製作所、トヨタ自動車工業、ブリヂストンタイヤ、石橋財団、ソニー、日本IBM、久保田鉄工、出光興産、大丸、エッソスタンダード石油、東京放送、日清製粉、日本石油、日本石油精製、柳河精機

以上の他、私立大学の協力第一号として神奈川大学が応募されているが、会員校の教授など個人寄付者も五四名に及んでいる。

今後も、残る大企業に引続き協力依頼を継続するとともに、当ハウス利用企業を重点に、訪問依頼を拡大し、目標達成をめざすことにしている。

大蔵省による寄付金の損金指定期間は、昭和53年1月31日までとなっているが、「試験研究法人」として公式に認められたセミナー・ハウスは、引続き損金指定の特典をうけて、開館十周年記念事業の第二次募金を継続すべく準備中である。この第二次募金は別に目標を設定して、主として「国際シンポジウム・ハウス」建築資金に当てられる予定である。

▼建築進捗状況

前号で構造・規模等を紹介した「国際セミナー館」と「交友館」は、去る8月1日着工し、その後工事日程に従い順調に進捗し、基礎工事を完了した。

国際セミナー館は、長期セミナー館に連結したかたちで建設される。傾斜地を掘り壊して基礎工事が進められ、現在、二階の鉄筋の組立てが終り、外形を整えるまでに至った。

「交友館」は、現サービス・センター屋上に建設されるが、コンプレッサーによる騒音も終り、鉄骨の組立てが始められている。

竣工はいずれも昭和53年3月の予定である。

なお共同セミナー、国際学生セミナー、各大学のゼミ利用者などの状況を考え、この新しい建物の落成披露は左記の期日を予定している。しかし竣工次第に使用は開始し、利用方法を試みるつもりである。

◎交友館落成式＝53年5月27日
◎国際セミナー館落成式
＝53年6月24日

♥寄付金報告♠

52年9月末現在

ご支援を感謝して
拝受いたしました

◆開館十周年記念事業寄付金
＝第四報＝（52年8～9月）

一五、〇〇〇円　匿名殿
一〇、〇〇〇円　染谷恭次郎殿
四、〇〇〇円　国際基督教大学
横田ゼミ参加学生一同殿

◆一般寄付金

一五、〇〇〇円　絹ヶ丘子供会殿
高嶺団地子供会殿
田中豊治殿
北野台子供会殿
森永牛乳由木配給所殿
石井栄治殿
四、九五円　千葉大学理学部
物理化学科アモルファス会殿
三、〇〇〇円　学習院大学英米文学科
児玉ゼミ殿
二、〇〇〇円　中渋谷教会
三沢八重子殿

◆植樹寄付

二〇、〇〇〇円　国際基督教大学
心理学夏季セミナー殿
三〇、〇〇〇円　第29回日米学生会議殿

◆指定寄付金

≪遠来荘石碑建設費≫
二〇、〇〇〇円　一橋大学茶道部
松月会殿

≪現物寄付≫
扇風機一台
茶道教授　鮎川宗藤殿
岐阜提灯一本
当ハウス館長　飯田宗一郎殿
大型スクリーン一台
日本神経放射線研究会
神経放射線セミナー殿
案内立看板一基
当ハウス元職員　前田　寿殿
記念樹（楠）五本
東京農工大学農学部
林学科教授　川名　明殿
林産学科教授　原口隆英殿

◆千人会

昭和52年9月末現在

◇現在会員は一、四七四名です

大学人＝　一、一四一名
社会人＝　三三三名

♣入会のことば

昨年11月、学会のゼミで初めて利用させていただき、良い環境に感心しました。今年11月も同じ学会（日本油化学協会）で利用させていただくことになっております。よろしくお願いします。

東京理科大学教授　北原文雄

◇新しく会員となられた方々

23名　〔第40回報告（申込順）〕

A　武蔵工業大学教授　益子　正巳殿
B　千葉県庁商政課主事　小路　隆生殿
C　主婦　植木　直美殿
C　主婦　長谷ヨシ子殿
C　武蔵野写真㈱　金子　伸二殿
A　立川市商店街連合会理事　新井　徳衛殿
C　三井生命社員　滝川　和子殿
C　東京都立大学助教授　小西　悟殿
A　国際基督教大学教授　丹羽　芳雄殿
C　戸張法律事務所　田辺　多喜殿
B　当ハウス職員　中村　彰次殿
C　主婦　丹下みさを殿
C　東京農工大学学生　宮崎　七重殿
C　主婦　大沢美千代殿
B　当ハウス職員　萩野　巌殿
C　共立女子大学助教授　高橋　節子殿
B　東京理科大学教授　北原　文雄殿
C　東京理科大学助教授　朝日　信夫殿
C　駒沢大学助教授　長澤　孝廣殿
C　青山学院大学教授　絆川　羔殿
C　横浜国立大学教授　太田　時男殿
A　青山学院大学学長　保坂　栄一殿
B　共立女子大学助教授　藤木　宏幸殿

♥千人会会員からのたより

結果は杞憂でしたが、胃の検診で要精密検査といわれ、余命の尊さを真剣に考えたときに、千人会の存在をとても有難く思いました。皆様のご健勝を祈ります。

日本大学第二高校教諭　村上　光雄

＊

梨が実るとこの時期です。一層の御発展を祈りつつ。

順天堂大学教授　山本　武彦

＊

誕生日カード有難うございました。今年はWCCの信仰職制委員会がドイツであり、帰りスイスに寄って元気で帰ってきました。

東京女子大学教授　小川　圭治

＊

只今、家内再びドイツに行っております。当地にて元気に誕生日を迎えたよし、家内にかわってお送りします。

（宣邦）

早稲田大学教授　子安美知子

◇会費ありがとうございます

52年8～9月（敬称略）

丹羽芳雄、新井徳衛、益子正巳、松山正男、鮎川宗藤、熊田陽一郎、井上孝、坂田道太、白浜謙一、絹川正吉、大沢美千代、丹下みさを、宮崎七重、長尾龍一、近藤晃、田辺多喜、小西悟、滝川和子、金子伸二、長谷ヨシ子、植木直美、千葉岑雄、伊藤清子、原島幸太郎、三宅彰、山田耕司、山田勇、野口武徳、清水昌三、長野武、色川大吉、千住鎮雄、中村浩三、田村恭、大蔵隆雄、村上光雄、小川信子、高村象平、稲田拓、山岡喜久男、安宅光雄、芹沢正三、若槻泰雄、山本武彦、市川博、小沢重男、竹下敬次、岩内亮一、中村英勝、松村信治郎、内山力、原誠、総山孝雄、角瀬保雄、鈴木成文、田中庄蔵、山口重克、小池生夫、黒田孝郎、永田清、岸英朗、山本茂、栗本弘、浅井邦二、福島要一、渡辺昭夫、神山四郎、大河内繁男、大吉芳彦、下田弘、藤井隆、時枝満康、松瀬貢規、小林正一、福山仙樹、鈴木修次、中川重雄、原田行男、山本芳夫、小田切松義、藤田淑子、高山昇二郎、石川淳志、岡村文子、高松弘毅、菊池雄二、関田寛雄、安藤良雄、武澤信一、高村多賀子、千葉正士、内ヶ崎贇五郎、小堀桂一郎、片山清一、岡本剛、小川圭治、喜多勲、鈴木忠義、西村善四郎、増田茂樹、宮坂宏、小林忠義、村島家子、泉治典、神保信一、森川和久、市川惇信、藤井幸彦、山本襄治、新井勝紘、藤永光之、片山覚、加藤榮一、武藤英輔、児玉久雄、島袋嘉昌、宇川和子、寺川国秀、今堀和友、楢林博太郎、松崎奈岐、中村彰次、萩野巌、子安美知子、松田徳一郎、三輪公忠、伊藤良二、山井湧、小和田恒、松田武彦、井深淑子、佐久間徹、森岡敬一郎、永井克孝、岡村秀勇、萩原龍夫、大澤綱一郎、井手久登、三村卓雄、村上陽一郎、品川孝次、松本健次郎、楯吉彦、谷俊治、町野朔、松屋登、横山宏、大東百合子、安嶋彌、長津一郎、坂本義和、伊藤隆吉、尾形憲、長澤孝廣、飯田経夫、宮川透、朝倉孝吉、鞍馬菊枝、鈴木守、岡村甫、栗原照子、岩崎不二子、岡野澄、押田勇雄、堀川浩甫、長松昭男、後藤米夫、阪本泉、田村康男、池上秋彦、岡茂男、伊能敬、小林祐子、堀江忠男、筑波常治、山崎真秀、東寿太郎、大村政男、小田切美文、安達義明、飯島泰蔵、木村富夫、佐藤康男、河野恵

予告

▼第5回国際学生セミナー

主題＝文化接触と日本―大きな日本・小さな日本人―
JAPAN AND THE WORLD: CULTURAL INTERFACE—Strong Japan, Weak Japanese

期日＝昭和52年12月16～18日

■全体講義

国際社会のなかの日本人
国連大学副学長　武者小路公秀

■セクション演習　日本経済成長の文化的意味（グレゴリー・クラーク）／日本の外交と文化（武者小路公秀）／行動から見た日本人の価値意識（鈴木孝夫）／日本の技術者と技術（内田星美）／国際交流―文化の相違をどうこえるか（金山宣夫）

【募集人員＝日本人学生55名、留学生30名、その他15名。締切12月6日】

……

▼第96回大学共同セミナー

主題＝現代の社会主義

期日＝昭和53年1月13～15日

＜全体講義＞

現代社会主義の考え方
東京大学教授　大内　力

＜講演とセクション演習＞　現代社会主義の考え方（大内力）／ソ連型社会主義の構造（佐藤経明）／中国社会主義の理念と現実（矢吹晋）／東欧社会主義の特殊性（斎藤稔）／現代ヨーロッパの社会主義思想（新田俊三）／資本主義と社会主義（馬場宏二）

【募集人員＝一〇〇名。
締切12月20日】

＜敬称略＞

♣新入生が「学生になる」ための条件とは

大衆化に苦悩する各大学が、新入生を対象にオリエンテーション合宿を実施する例が、ここ数年目立ってきている。受験準備のための高等学校生活に終始した学生が、自らものを考える能力を失い、「アイデンティティの拡散」といわれるように自らの拠り所を見い出すことができないでいることが多い。教授と学生との双方にある大学共同体意識の欠如、一般教育の空洞化等々、彼らのおかれている環境は決して自己の確立への助けとならない。知性の啓発のみではなく人間形成をも使命とする新制大学は、そのための教育機能を果たす場と機会を積極的に模索していかなければならないだろう。このための施策の一つがオリエンテーション合宿である。

若葉から青葉へのシーズンは、この多摩の丘に、この種の新入生セミナーが数多く開催された。大別すると一つは大学主催の大規模なセミナー（多くは学科単位に行われる）であり、一つはゼミ指導の教授や上級生による研究室単位の小規模なセミナーである。

開館二年目を迎えた時点で、本紙9号（昭和42年6月25日）は、オリエンテーション特集記事を組んでいる。これによると当時は八校ほどが大小の合宿を実施しているが、〝セミナー・ハウス〟と称する合宿施設を持つようになった大学が増えるにつれて、宿泊を伴った新入生オリエンテーションもさかんに行われるようになった。

今年、多摩の丘で繰り広げられた大学、学科単位のオリエンテーションは次のようである。なかでもお茶の水女子大学は昭和42年に予算化を実現して実施して以来、連続一二回を数えている。

このほかにゼミ単位に行われたものが五グループ（延一〇六人）となっている。

× × ×

大学によって、オリエンテーションの形態・内容も様々であるし、必ずしも成功とばかりは言い切れないで、多くの課題を残している。しかし、大学論に終始する総論の段階はすでに過ぎた。ここに各大学の新入生が綴ったオリエンテーション体験記を紹介する。それぞれが個人の体験した一つの事実である。「各論」があること、それが当ハウスの最大の強みである。

わたくしと共同生活

多摩の丘の学生体験記を拾う

❶東京医科歯科大学教養部医学進学課程

❷お茶の水女子大学児童学科

❸東京学芸大学幼稚園教育学科

❹東京都立大学法学部

❺日本女子大学家政経済学科

❻文京女子短期大学英語英文学科

……❶

新入生の親睦会を兼ねてのオリエンテーションで、今年の4月に初めて大学セミナー・ハウスを訪れたが、私はこのことが自分の生活に一つのピリオドの役割を果たしてくれたような気がしている。

受験生活から大学生活への転換というのは、やはりそう簡単なことではないのだが、私の場合は五月病的なものが萌してきた時には、あのセミナー・ハウスでの経験を思い出すことにしている。

小グループに別れて、まだ見知らぬ同級生達と先生を囲んで、自分達がもっている医学像について、話し合うことができた。もちろん、私も医学書や医療関係の本を生かじりしてはいたのだが、われらの先輩で、大学で実際に医学を講じている先生方に質問することができたのは、大変有意義であった。それに、島本多喜雄名誉教授の特別講演「如何にして不治の病いの手立てを見い出すか」では、小脳失調や進行性筋萎縮病のスライドとそれについての教授の解説がひどく印象に残っている。私の中で漠然としていた医学への夢やあこがれが急に現実的な色彩をおびてきた。もちろん方向はまだ定まってはいないのだが、やってやるぞという気力がわいてきたのは確かである。

残念なことに、たった一晩のことであり、セミナー・ハウスの魅力をすべて知り得たということはあり得ないし、今回は新入生全員が対象であったから、大人数でもありセミナー・ハウスのモットーである大学・学部・専門の壁を乗り越えての話し合いをする機会がなかった。特に東京医科歯科大学のように、小規模で、右を向いても左を向いても医学生・歯学生という状況の中では、様々な大学、様々な専門の学生と話し合える場所というのは貴重であろう。

私は、いつか必ず大学共同セミナーに参加してみようと思っている。そう、それから食事がとてもおいしかった。おかわりもできたし、やはりこれも魅力の一つに違いない。

（近藤光一）

……❷

4月に私達児童学科三一名がはじめて顔を合わせてから、これまでにもクラスの団結を強めようと

新入生オリエンテーション・セミナー実施状況

月	大学名	学部・学科	教師数	学生数	合計	泊数	延人数
4	聖路加看護	衛生看護	11	60	71	2	140
	東京医科歯科	医・歯	25	160	185	1	185
	東京	教養	—	250	250	1	250
	東海大学医療技術短期	第一・二看護	20	179	199	2	391
	東京学芸	幼稚園教育	4	30	34	1	34
	都立工科短期	生産管理	7	60	67	2	110
	都立商科短期	経営	13	77	90	1	90
	日本女子	社会福祉	10	120	130	1	130
	東京都立	地理	1	39	40	1	40
	〃	物理	6	45	51	1	51
	東京薬科	学生自治会	5	87	92	1	92
5	東京学芸	第三部理科	11	99	110	1	110
	都立立川短期	食物・家政	23	83	106	1	106
	都立工科短期	機械工学	19	78	97	1	97
	文教大女子短期大学部	英文	9	199	208	2	415
	文京女子短期	英語英文	13	235	248	1	248
	〃	〃	13	237	250	1	250
	日本女子	家政経済	9	97	106	1	106
	東京都立	理	14	64	78	1	78
	東京学芸	生物学	11	44	55	1	55
6	東京都立	経済	1	53	54	1	54
	白梅学園短期	保育	16	191	207	2	409
	〃	〃	17	166	183	2	363
	東京都立	法	5	76	81	1	81
7	東京学芸	教育・理科教育	14	164	178	1	178
	淑徳	社会福祉	1	24	25	1	25
	お茶の水女子	文教育	23	172	195	1	195
	〃	理・家政	19	186	205	1	205
	都立工科短期	電気電子工学	12	46	58	1	58
	津田塾	数学	12	49	61	1	61
9	都立商科短期	商（二部）	8	92	100	1	100
合計			352	3,462	3,814	37	4,707

いろいろと努力してきました。三ヵ月もたつと大分気心も知れてくるのですが、今一つ盛り上がりが足りないと感じて、新入生セミナーに期待を持っていた私です。

寝起きを共にするということには不思議な力があるものですね。それまで心にしまっておいたことを話してもいい、話してみようといった気分になります。行動を共

◎新入生と大学共同セミナー

萩本真一郎

大学に入って、二ヵ月近くなった。率直にいって、僕の大学では専門の法学はもちろん、一般教育科目のほとんどが、いわゆるマスプロ教育の形で行われている。「教育とは、人間と人間との精神交流の上になり立つ成長過程である」という大前提から、大学の現状のみを純粋に判断した場合、本当の教育がなされていないことになる。その点、大学セミナー・ハウスでの二泊三日は、大学生活のスタートを切った僕にとって、実に多くの示唆に満ちたものだった。そのごく一部ではあるが最も心に残った点をあげようと思う。

先ず、たとえ書生論で終っても議論すること―しばしば徹底的にすること―は絶対に必要だということ。自分の無知、未熟さを人前でさらけだすことのないようなことでは成長しないと思う。いびつな人間ばかりの、いびつな社会ができてしまうのではないだろうか。

ただ、議論においては、自分の考えを的確に要約し、相手にわかって貰えるように発言すべきことを痛感し、自分ながら情無く思った。

第二の点は、＜簡素な生活＞が＜高き思想＞の前提ではないかと気づいたこと。大学に入って少々生活を乱した。ここ一ヵ月程、あまり真剣に考えようとしたことがなかったように思われる。僕でも無性に知識を求めたくなったり、体を動かしたくなったりすることがある。それに反して、まったく生気を失い、何事もやる気を無くすことも実にしばしばある。この両面を持つこと―振幅の大きさ―が若いことの一つの証拠ではないかと思う。このように考えると、物質的に恵まれすぎた生活にべったりひたっては、向上心とか冒険心は生まれてこないのではないかと思う。常に何か不足を感じることが必要なのではなかろうか。だが、現状が〝マスプロ〟なのだと不足を感じても、自らの手で何ら克服する努力をしないなら実に大人気ないのではないかと思う。

第三点として、多くの点で学問に対する姿勢を教えられた。その中で、すぐれた先人たち、先生たちへの畏敬の念を持つこと、謙虚になることの必要が特に心の中に残っている。（第91回大学共同セミナー参加者・早稲田大学法学部1年）

にすることにより、どうしても自分本来の姿が出てくるものだし、話し合う時間が十分にあるからでしょう。

大学の授業は自分でカリキュラムを組みますから、せっかく同じクラスになっても、クラスメート全員が顔を合わせるのは週に二回ぐらいです。大学に入った目的の一つはいろんな人と話してみたいということだったのですが、今までは表面的な会話しか交せませんでした。今回、ゆっくりと話し会う時間を得ることができ、今まで知らなかった友達のいろいろな面を知ることができ、とてもよかったと思います。（石橋玲子）

❸

ほんの十数時間のことであったが、初めて大学セミナー・ハウスを訪れて、まず期待していた以上の設備に感激した。高校時代に利用した某合宿センター程度かと思っていたが、清潔で使い心地良く、明るい雰囲気だった。

しかし、それ以上に驚き、感激したのは、八王子のすばらしい自然である。目ざめたときの金色の朝、ねぼけ眼にとび込んできた新鮮な緑、遠く多摩丘陵を見渡せる大らかなながめ……何をかくそう私は、地元八王子の住民であるけれど、陣馬・高尾の山々にはない、ほっとするような自然だった。部屋がそれぞれ一戸建てになっていて、それらの自然に触れる機会が多いのもうれしかった。食堂に掲げてあった「生活は簡素に、思想は高潔に」という文句にハッとさせられ、この言葉を忘れずにいよう、と思ったものだった。

このようにすばらしい設備・自然・待遇の中で、勉強に、ゼミにとうち込める施設があるということは私たちにとってうれしい特権である。また、それを有意義に利用できるか否かは、私たち自身の問題である。

勉強やスポーツを通して、他大学との交流や他の学生とのふれあいも、また学生生活にとってとても大切なことであるが、このセミナー・ハウスは、そういうふれあいの場であり、私たちを待っていてくれそうな気がする。（大浦美由紀）

❹

初めて訪れたセミナー・ハウスは、東京と思えぬほど緑に囲まれていること、また変わった形の本館が印象に残っています。

今回の懇談会は、法学部では六人の教授が参加して下さり、学生一〇人に教授一人の割合で充実したものでした。私達のところへは教養の法学Cを教えておられる石村先生が来られ、三時間ほど懇談しました。先生の外国、特にアメリカのロー・スクールでの体験談、アメリカの弁護士の地位の高さ、また経済学や社会学などを学ぶ必要性が頭に残っています。日本の司法試験は簡単すぎるというお話にはショックでしたが、勉強しようと発奮する機会を得たことは意義あることだと思いました。

このような懇談会によって、学生と教授の接触が得られることは、マンモス化した私大には見られないよいことだと思います。

❺

5月22、23日の八王子セミナーには、私達家政経済学科の新入生百余名が参加した。

簡単なミーティングの後、さっそくグループに分かれて、テーマ別にディスカッションを行った。何となくよそよそしかった初めに比べ、夜の討論では和気あいあいと、本学を選んだ理由、本科を選んだ理由、将来の希望などを話し合い、すっかり打ちとけてしまった。先生からも、私達の果たすべき役割や地位、卒業後の進路といった具体的なお話をうかがうことができた。

次の日の全体会では、それぞれのグループの発表を行ったが、どのグループもそれぞれ得るところが多かったのか、みな生き生きと報告していた。たった一泊二日のセミナーだったが、そこで得たものは非常に多く、これからの方針に大きな影響を与えるだろう。自然の中で、先生や友達とじかに触れ合うということは何とすばらしいことかということを痛感した。

残念なことは、もっと早くこういう機会が欲しかったことと、こ

（6ページ5段目へつづく）

▽広報用に各種のパンフレットを発行

本年度に入って次の5種類のパンフレットを作成し、利用者の拡大、ハウスの紹介につとめている。積極的に活用されることを望んでいる。

(1) **DAIGAKU SEMINAR HOUSE—First Ten Years Since its Founding in 1965—**

昭和48年に作成した「大学セミナー・ハウス—成り立ちとその歩み—」の英語版で、かねてより計画されていたが、ようやく日の目を見ることとなった。一六頁の小冊子であるが、内容は上智大学川田侃教授が「文部時報」に執筆されたものの英訳である。この翻訳には日本女子大学徳末愛子教授が尽力された。英語版の編集にあたって、永井道雄前文部大臣の「大学院セミナー館落成記念講演」、アジア財団日本代表J・L・スチュアート氏の小文、外国人来訪者の印象記、最近の簡単な統計などを付録として収録してある。

これによって当ハウスの活動を海外に広く紹介することができるわけである。

(2) **学会・会社その他の一般団体が研究会・シンポジウム・研修会などに利用する場合のために**

(3) **遠来荘の栞**—茶室の紹介をかねて—

(4) **遠来荘茶道教室へのお誘い**

6月から鮎川宗藤門下のご奉仕で開かれることになった茶道教室のためのパンフレットである。表紙の遠来荘と前庭の水墨画は、施設職員・西村県治の手になるもので、なかなか好評である。

(5) **図表で見る創立15年の歩み**—昭和51年度大学セミナー・ハウス年報別冊

セミナー・ハウスは誰が建てたのですか？　国立の施設ですか？　その資金源は？　といった質問が必ずといってよいほど見学者や新しい利用者から発せられる。創立から開館を経て今日に至るまでの統計資料を網羅し、円グラフや棒グラフで表わした一〇頁の小冊子である。

≪企画室宛書簡≫

東京都立大学教授　**関口　晃**

過日は『セミナー・ハウス・ニュース』五〇号と『図表で見る創立一五年の歩み』とをお送り頂き、有難く御礼申し上げます。典雅な図表の一つ一つを拝見しながら、ゼミを通じて勉学し、生活する学生の人達、学生との交流を通じて持てるものを惜しみなく与えられる指導教授の先生方、そうして学生と先生方の活動を支えるために誠実にベストを尽くしておられる飯田館長はじめセミナー・ハウス在勤の方々、そうしてそれらすべての方々の真に人間的な息吹きのるつぼを改めて鮮明に想い起させられました。共同セミナー委の一員としても、大いに感ずるところがありました。（10月15日）

（共同セミナー委員会副委員長）

◇海外通信

英国エジンバラ大学にて

東京工大助教授　**松山正男**

例年なら7月中旬にJACETの夏期セミナーでお世話になっている頃ですが、今年は7月10日から六週間ハワイ大学でセミナーを行っております。友人達がハワイで研修中、小生は上智大学のミルワード教授に連れられイギリスで六週間、研修と見学を行っております。ケンブリジとオックスフォードで各一週間、当地の教授の講義を聴き、あとは各地の大学寮を転々と泊り歩きます。

本日はスコットランドのエジンバラ大学に来て、学生寮に滞在しております。どこに行っても日本人の大群がひしめいており、経済強国のありがたさを改めて知りました。ケンブリジもオックス・フォードも大学の学生寮に住み、英語研修に何百人と日本の若者たちが来ております。小・中学生さえ参加しており、イギリスもアメリカもヨーロッパも日本人で夏とお正月は占拠してしまっている感があります。ところが、たとえばケンブリジの英語研修には約五百名ぐらいの高校生と大学生が日本から参加しておりますが、個人参加のため、指導者とかリーダーを自主的に選ぶことなく三～五週間すごすため、夜中までさわいだり、煙草のなげすて、あらゆる面で友人の英国人からそっと注意されるようなこと——英国的表現は抑制されており、実は日本流には「頭にくる」とでも言うべき行動を示しています。つまり、中・高校の修学旅行の実情の外国版とでもいうべきもので、学校教育の実態と共に家庭教育の躾のなさをさらけ出しているありさまです。

そこで改めて大学セミナー・ハウスでの日々を思いうかべます。いつも必ずしも理想通りとはいかなくても、やはり指導教官のもとに、目的をもった研修、人格的触れあいのもつ意味を感じます。日本もイギリスも学生寮がアパート化してゆく時代の流れの中で、セミナー・ハウスの今後とも果すべき役割が大きいと痛感しました。

美しいスコットランドのエジンバラ大学を基地とし、英文学上のゆかりの湖や町や教会や城をめぐってつくづく思いますのは、文化は死んだとき観光地と化するということです。大学セミナー・ハウスは当分観光地にはならない、と改めて確認させられました。

扨て、小川芳男会長の御意向もあり、第12回JACET夏期セミナーを明年も是非八王子で開催することを目標に、目下ハワイ・セミナー参加者が計画していると聞き、別便にて改めて事務局にお願い致しました。その節はよろしくお願い致します。

大変遅れましたが千人会会費同封致します。1月に母に死なれ、あわただしく悲しみにかきくれて日をすごしているうちに遅くなり申訳ございません。飯田館長先生はじめ、セミナー・ハウスの皆様の御健康をお祈り申上げます。

（8月6日）

＜館長宛書簡より＞

（5ページよりつづく）

これからこういう機会が予定されていないことである。（小島美佳子）

⑥

5月19、20日の両日とも好天に恵まれ、都心での日常生活から解放され、自然の懐に抱かれて、新しく出会った友人とともに生活することができた喜びを痛感しています。

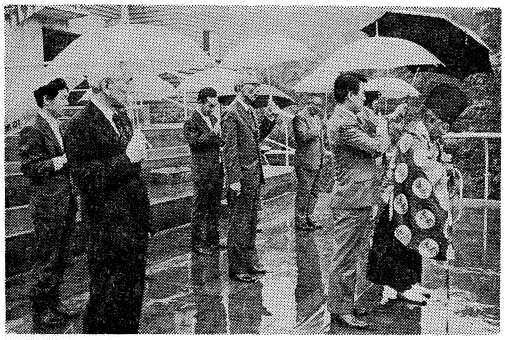
開会に当たってうかがった飯田館長のお話にもあったとおり、セミナー・ハウスは正しく人間の情報交換の場でありました。まだ知り合って二ヵ月もたたない友人とも融け合って、お互いを知ることができ、また、自己を見つめ直すには十分すぎるほどの自然の力にも触れることができました。

（永野　文）

1977

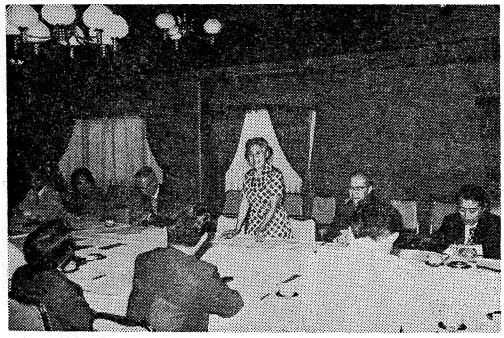
グラフに見る人と行事

春から夏の活動を拾う



← 国際セミナー館地鎮祭（長期セミナー館屋上、6月23日）

→ 空から見たユニット宿舎群（東京新聞提供）

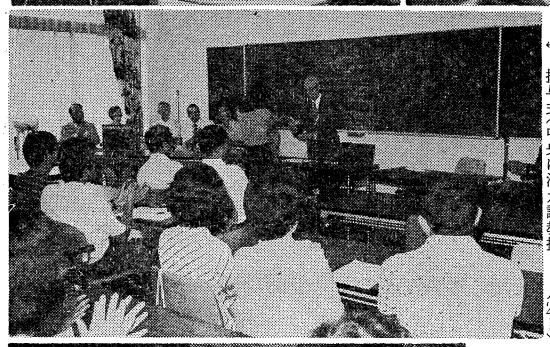


← 共同セミナー委員会、岡宏子委員長再選挨拶（私学会館、7月8日）

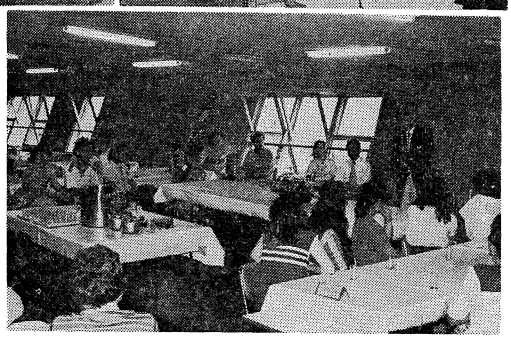
↓ 旧友交歓昼食会（大塚久雄先生を囲む板垣，川喜田両先生，9月24日）

↓ 千葉商科大学事務職員研究会お茶会（中央は東条吉彦事務局長，6月29日）

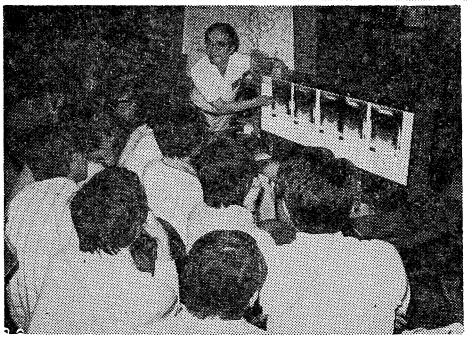
↓ 第4回核融合理論研究集会お茶会（中央は吉川庄一プリンストン大教授，6月14日）



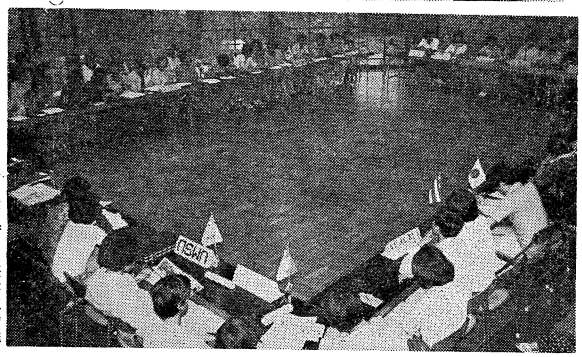
← ELEC（英語教育協議会）修了証書授与式（中央は清水護教授、8月21日）



→ 第29回日米学生会議お茶会（7月26日）



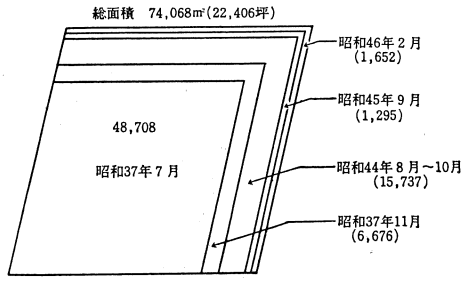
← 日本神経放射線研究会（8月21～26日）



→ 第24回国際学生会議（8月4～7日）

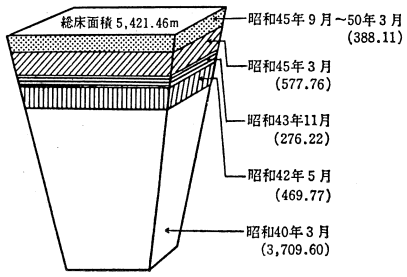
土地取得状況（昭和52年３月現在）

（単位：m²）



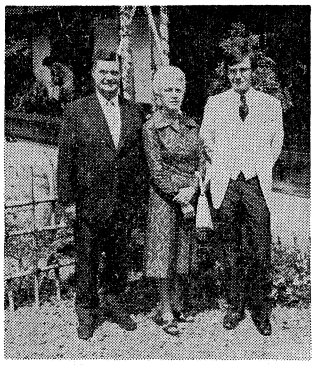
建物取得状況（昭和52年３月現在）

（床面積，単位：m²）



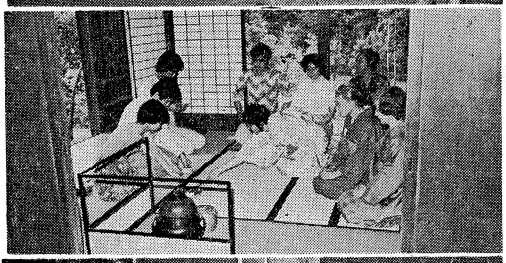
↑ 東京医科歯科大学新入生オリエンテーション，学長・学部長も参加して（４月12日）

↓ アジア財団代表Ｊ.Ｌ.スチュアート夫妻と米国本部のＷ.Ｆ.ファーガン氏（６月５日）



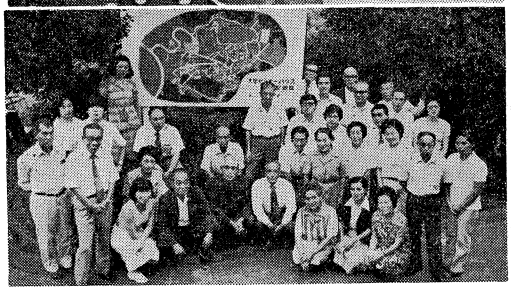
↑ ウィラメット大学日本研究グループ引率者Ｒ.Ａ.ヨーカム夫妻と（９月17日）

← 盆踊り、地元の人たちと外国人学生たち（７月29日）



← 遠来荘茶道教室開講（６月26日）

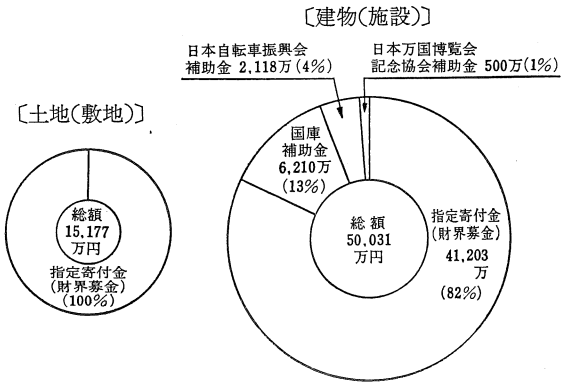
← 巣箱づくり（第１回）の学生たち（７月３日）



← セミナー・ハウス現職員の面々（旧職員前田寿氏寄贈のキャンバス案内図の前で、８月27日）

↑ 国連大学資源研究グループ小堀巌東大教授，矢沢大二都立大教授引率（５月３日）

土地，建物の資金源（昭和37年度～51年度）



◈第11回協力会員校事務連絡会

会員校の理解と協力を強めるために

三一大学から四三名が出席

昭和52年10月7日

新たに協力会員校として加入された駒沢大学、東京薬科大学、杉野女子大学の歓迎の意味を含め、昭和52年度の協力会員校事務連絡会が10月7日開催された。

当法人が会員校と緊密な連絡を保ち、その運営を一層円滑にすると共に、会員校事務担当者の相互の親密度を深める目的で毎年一回開催されてきたこの連絡会も第11回を迎えたことになる。

当日は午前10時、館長あいさつに始まり、特に日本の大学教育の問題点から一つの大学ではなし得ない教育分野に言及、事務職員の責任の重いことが強調された。次いで、出席者の感想もまじえた自己紹介があり、セミナー・ハウス各部事業を企画、施設、経理、業務にわけて、それぞれ担当者が報告説明をした。館長の補足説明も加えられ、当ハウス設立の哲学が出席者に感銘を与えたようだ。出席者は構内見学、歓迎昼食会の後、質疑応答、協議を続け、午後三時解散した。

当ハウスに初めての訪問という人も多かったが、実地の見学と詳しい説明から、異口同音に今後教授学生に利用を促進したいとの発言が相次いだ。当ハウス側からは、協力会員校制度は実際にハウス運営に会員校が直接参画していること、会員校会費の意義は大学が共同して日本の将来を担う学生に真理探求の機会と場を提供することにあること等について理解を求めた。

●事務連絡会に出席して――

上智大学学生部学生生活課

星島明光

拝啓　読書のために快適な秋が深まって参りました。大学セミナー・ハウスの諸先生皆さま方におかれましては益々ご清栄のことと思います。さて、過日の大学関係者による協力会員校連絡会議に出席させていただき心から感謝いたしております。私にとって、従来から八王子の大学セミナー・ハウスについては耳にしておりましたが、実際に訪ねてみて大変感動を受けました。と申しますのは飯田館長先生の言葉に象徴された大学セミナー・ハウスの「基本的な考え方」としての哲学でした。昨今の大学のもつ種々の悩みの中で、将来の大学の姿を想像する時、我々が日頃とかく忘れ勝ちな次代を担う学生たちのための「人間としての真実と愛情を求める」この言葉の意味の再発見でした。先生は静かでやさしさの中に強力な印象を私共に与えて下さいました。大衆化し、形式と組織や制度のうちに大学も埋没しようとする時、自発的に学問意欲をかきたたせる手段を今後真剣に検討研究しなければならないと感じています。学歴社会をのり越えて広い視野に立ってこれからも学生、教職員との生きた交流が計られんことを願っています。又、今般は私大連の会合のために途中で失礼いたしましたことと私として申し訳ありませんでした。どうか健康には充分留意されて我々若者をご指導下さいますよう。大学セミナー・ハウスの未来計画の中に国際交流といった相互のコミュニケーションの場の考えがあると述べられました。更なるご発展をお祈り申し上げお礼の言葉といたします。企画ご担当の飯田さんにもよろしくお伝え下さい。

敬具（10月12日）

◈会員校事務担当者名簿

（国公私別・入会順）

東京大学（学生課）　学生係長　村上　広元
一橋大学（庶務課）　渉外係長　八巻　滋
東京教育大学（学生課）　課長　安武　毅
東京工業大学（学生課）　係長　鯨岡　博守
東京学芸大学（学生課）　課長　大熊徳太郎
東京医科歯科大学（学生課）　係長　栗林　恒雄
東京農工大学（学生課）　課長　込山　福一
電気通信大学（学生課）　学生主任　川本　忠
お茶の水女子大学（学生課）　課長　関　宗正
東京外国語大学（教務課）　係長　和田　博
横浜国立大学（学生部厚生課）　課長　平井　文雄
東京都立大学（学生課）　係長　平井　武夫
早稲田大学（学生生活課）　課員　森尾　武萬
日本女子大学（学事課）　課長　岸田鶴之助
慶応義塾大学（庶務課）　課長　岩野　節夫
明治大学（教務課）　課長　平田　興次
中央大学（学事部）　次長　田上　愛之
青山学院大学（庶務課）　課員　井上　三芳
法政大学（厚生課）　厚生係主任　吉川　英昭
立教大学（学生調査課）　課長　恩田　耕造
日本大学（学生部）　部長　田口　三郎
東京女子大学（総務課）　課長　吉野　国香
武蔵工業大学（学生課）　課長　川嶋　辰雄
明治学院大学（学生課）　主任　反田喜代志
成蹊大学（庶務課）　課長　横山　博
津田塾大学（総務課）　課長補佐　岩田　弘一
順天堂大学（学生課）　課長　上西　守夫
共立女子大学（学務課）　課長　高橋　勝彦
国際基督教大学（学生事務課）　係員　池田　篤
武蔵大学（学生生活課）　書記補　大沢　勝
上智大学（学生生活課）　課長　鈴木　成一
東京慈恵会医科大学（進学課程）　事務長　伊藤　勝
東京理科大学（庶務課）　課長　佐藤　三郎
東京経済大学（総務部）　用度営繕課長　佐藤　幹雄
東洋大学（学生部）　次長　高橋　貞一
専修大学（学生厚生部）　次長　村田　正敏
東京家政大学（学生部）　課長　平沢　尚孝
東京家政学院大学（教務課）　課長補佐　松崎　三次
大妻女子大学（学務課）　課長　新藤長太郎
学習院大学（学生課）　課長　中村　義明
成城大学（学生課）　課長　島野　黎行
千葉商科大学（庶務課）　課長　冨田　嘉明
聖心女子大学（学生課）　課員　内野　剛裕
神奈川大学（学務課）　課員　神保　弘
工学院大学（学務課）　課長　洞沢　成
芝浦工業大学（教務課）　課長　安田　徹二
東海大学（教務部）　事務室長　木本　雄一
東京農業大学（学生課）　課長補佐　細川　繁一
鶴見大学学監　角家　文雄
駒沢大学（学生課）　主任　大内　勝蔵
東京薬科大学（学生課）　課長　佐々木　孝
杉野女子大学学監　岩沢　英一

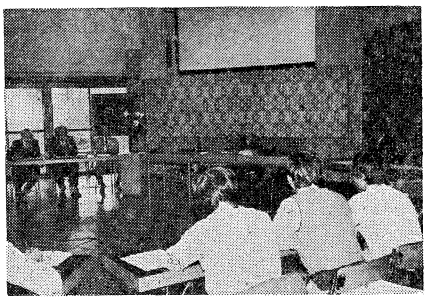
※※※※※※※※※

続「ロビンソン・クルーソーと現代」
大塚久雄先生を迎えて リユニオン・セミナーを行う

昭和52年9月24・25日

※※※※※※※※※

＜ゲスト講演＞
経済史から見た「ロビンソン物語」とその著者
国際基督教大教授　大塚久雄氏
＜講演＞
ロビンソン・クルーソーの世界
慶応義塾大学教授　山岸　健氏（運営委員）
人間性のなかのロビンソン・クルーソー
聖心女子大学教授　岡　宏子氏
＜参加学生＞71名（内女子34名）
慶大（20）、津田塾大（14）、早大（7）、成蹊大（4）、東大、東外大、青学大、ICU、東女大（各3）、聖心女大、立教大（各2）、埼玉大、千葉大、東工大、横浜国大、駒沢大、専修大、日本女大（各1）、合計18校


大塚久雄先生のゲスト講演

◇　◇　◇

5月に開催された第91回大学共同セミナー「ロビンソン・クルーソーと現代」の終了後、企画立案者の山岸健先生は、本紙に寄せられた感想文に「共同セミナーは終了した。だがロビンソン・クルーソーは、今なおセミナー・ハウスに滞在しているように私には思われる」と記している。このリユニオン・セミナーは、5月にゲスト講演として予定されていた大塚久雄先生が健康上の理由で欠席されたため、先生のご病気の回復を待って開催されたものであるが、まさに前回参加者と指導教授との「再会」という意味だけでなく、あたかも当ハウスに「滞在」していたクルーソーその人に「再会」するセミナーとしての意義を見事に現出させた二日間であった。

5月に全体講義を担当された朱牟田夏雄氏、セクション指導の小池滋、竹下敬次、近森正の三氏に加え、大塚先生の友人であり一昨年開かれた当ハウス開館十周年記念シンポジウムにおいては大塚先生とともに造詣深いお話をされた板垣與一氏、そしてやはり友人であり医学史の分野ですぐれた業績をものにしている当ハウス理事長川喜田愛郎氏らも列席された。さらに共同セミナー委員会委員長・岡宏子聖心女子大教授の積極的なご協力によって特別講演が行われることにより、新たに心理学の視角が加えられ、一層豊かな学際セミナーとなった。

「経済史から見た『ロビンソン物語』とその著者」と題する大塚先生の講演は、いままで照明されることの少なかったデフォー経済論の先駆的意義にふれた。デフォーはその政治的動揺にもかかわらず、アダム・スミス以前に再生産論、経済循環論を現実に即して述べており経済理論の立場では一貫して中産者層を押し進める立場を貫いたことの意義は大きい、と該博な経済史の知識をもってロビンソン的人間類型の与える今日的意義にまで言及された。日本の経済史学のみならず戦後の思想史にも周知の影響を及ぼしておられる大塚教授を「一目でも」という学生たちは、穏やかな中にも学問の深さとパースペクティヴの広さをうかがわせる話に強い感銘をうけたようである。

講演後のティー・タイムでは、短い時間を惜しむように5月の思い出や先生との挨拶などが交わされ、和やかな談笑が夕陽の多摩の丘に繰りひろげられた。

引き続き夕食後は、山岸、岡両先生の講演である。ロビンソン・クルーソーに込められている生活哲学と生活技術は、今日に生きる私たちの生活意識の明確化になお貴重な素材を提供しつづけるだろうと、簡潔だが重要な示唆を与えたのは山岸氏。諷刺のきいた現代人の心理分析によって人間生育史に焦点をあて、ロビンソンの孤独と対置した興味深い話は岡氏。ともすれば他人を無視し押しのけてまで生きのびねばならない現代人の孤独は、かつての復古的な農村共同体へ回帰するのでなく新しい連帯意識へと成長しなければならないだろうという、異なった視点からの問題提起に学生たちの議論は深夜まで続いた。翌朝11時には、初秋の陽射しあふれる野外での語らいの後、延べ五日間にもわたるユニークな学際セミナーの幕は閉じられた。

しかしながら、二五〇年以上も前に創作された架空の人物が、これほど多様な学問の照射に堪えぬきなお汲めども尽きない問題をわれわれにのこしているという文学作品は、古典といえどもそうざらにあるわけではないだろう。講師、参加学生ともに最大の関心事はやはりわれわれ日本人のエートスと歩むべき道すじであった。大塚先生も「合理主義」や「個人主義」を安易に排するのでなく、ここに含まれている多様な意味を研究しなければならないと訴えられたが、どうやらロビンソン・クルーソーは深くて険しい「学問への道」という宿題をのこして遠い故国へ帰っていったようである。

山岸氏は、「もし、将来日本にロビンソン・クルーソー学会ができるとすれば、ここでの共同セミナーが意味深く振り返られることになるだろう」と語ったが、いつの日か再び〝ロビンソン学会〟で再会できることを期待したいものである。

*個人主義について
――リユニオン・セミナーで学んだこと

大河原宏之

去る9月24日、大塚先生を迎えてリユニオン・セミナーが開かれ、大塚先生の講演が三時間にわたって行われた。いくつかの興味深い問題の中でも特に印象深かった個人主義について僕なりに纏めてみた。

個人主義には大別して二つの類型がある。その一つは自己の名誉とか利益とかいう感性的欲求乃至エゴイスティックなものをそのまま発現していくような個人主義である。他の一つはピュウリタン的な個人主義即ち単なる社会的な束縛からの解放ばかりでなく、その前に自己自身のエゴイスティックなものからの自由という、個人の内面、自分自身が問題とされるような個人主義である。

個人主義の意味内容をロビンソ

ン的人間類型を軸にみてみると、まずピュウリタン的信仰に支えられた生の感性的欲求の否定の上に立つ個人の人格が問題とされるものから、それが影を落としているロビンソン的人間類型を経てルネッサンス的個人主義へ、即ち経済的には職業人という人間観は保持されているが、それを支えていた信仰という根は失われて、個人的エゴイズムが中心を占める個人主義へとして捉えられる。ロビンソン的人間類型は簡単に個人的利己主義として批難されるものではなく、人のことを思う、超越ということを知っている個人主義であり、そのような個人主義がなければ如何なる組織作りもできないし、ばらばらの砂の塊ではないコミュニティを作りながらその上に形成される市民社会も作り出すことはできない。

この指摘は、僕らが自由とか平等とか民主主義とかを叫びながらも、特に自由の現実に於ける内実が私的快楽や感性的欲求の充足でしかなく、まさにそこから自由それ自体が形骸化していく現状にあって、十分に考えてみる必要があるのではないだろうか。

〔本能的欲求の〕「真の否定を通して初めて真実の人間解放は達成されるばかりでなく、そこに真実の『人間』が啓示される。」（大塚久雄）

（早稲田大学政経学部3年）

■大塚久雄先生の講演から

デフォーに学ぶこと

◇このセミナー・ハウスが出来て私が初めて伺ったとき、あの本館の逆三角形の建物が私の目に非常に異様に映りました。今の飯田館長さんが、〝あの建物のかたちは学問の理想を象徴しているんです〟と懇々と説明してくれましたが、実はそのときあの逆三角形を見ながらふーっとデフォーのことを思い出していたんです。ダニエル・デフォーの若い頃の作品に"An Essay upon Projects"という本があります。これはフランクリンなんかにも相当影響を与えたほどの、ある意味では天才的といっていいような書物ではないかと思いますが、銀行や保険などの事業について具体的にかなり先駆的に予見しているものです。この中に"On Accademy"という章があり、さらにその中に付録のようなかたちで「女子大学設立のプロジェクト」という個所があります。ここでデフォーは、女子大学を建てるには建物は三角形にしなければならない、といっているわけです。時はまさに女性解放がイギリスで始まろうとしていた頃です。彼は大いに女性の肩をもって、女性も男性と同じように教育しなければいけないといいます。女性を教育するには、女性に命令したり自由を侵害したりするようなやり方ではいけないから、男性が陰謀的に近づいてくることを防ぐためにこういう形にするというんですね。（笑い）建物も三角形、周りの塀も三角形にして入口は一つというように周囲を見通しよくして、あらぬものの侵入を防ぐというわけです。意味は違うけれど、デフォーを思い出して私はしげしげとあの建物を眺めていた、というわけなんです。

◇次に個人主義の問題ですが、ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の『精神』」の中で、カルヴィニズムの選びの教説は歴史上かつてみなかった個人の内面的孤立化をもたらしたといっております。同時にその何ページか後に、ピュウリタンたちあるいは禁欲的プロテスタントたちは非常に組織づくりがうまい、個人がバラバラになってしまうんじゃなくて逆に組織づくりが非常にうまい、という個所があります。これを矛盾だといって非難する人がおりますが、これはヴェーバーの解釈が矛盾しているのではなく内面的孤立化の意識を持っていたからこそ組織づくりがうまかった、という事実なんですね。ここにおられる飯田館長さんは本人も言っているようにクェーカーの影響を強く受けられた。だからこそこういう組織を生み出されたわけです。（中略）デフォーの中にはそういう内面的個人主義がなお生きていた。超越ということを知っている、人のことを思う個人主義ですね。こういう個人主義がなければ、今でも、いつまでも組織づくりというのは出来ないんだということを知っていただきたいわけです。

*多摩の丘の五日間
――体験した生の充足

板橋　千明

私が「ロビンソン・クルーソーと現代」といういささか奇妙なテーマのもとに共同セミナーが開催されることを知ったのは今年の5月半ば、駒場の新緑のまばゆい頃だった。誰もが孤独感を持たざるを得ない現在の大学の状況の中で毎日を送っていた私は、このテーマに何かしら引きつけられるものを感じた。しかも大塚久雄先生のお話まで聞けるという。私は即座に参加を決意した。

セミナー・ハウスでの三日間は私にはまるで自分を取り巻く時間と空間の密度が著しく増したかのように思われた。短い時間に次々と新しい体験が私の中を通り抜けていった。そしてそれは何と素晴らしい体験の連続だったことだろう。セクション担当の松浦先生のエネルギッシュな講義、時として堂々めぐりに陥り、またある時には思いもよらぬ方向に発展しつつ進められたセクションにおける白熱的な討論、ロビンソン物語がかくも多様な視点から様々な問題を提出することに改めて驚かされたシンポジウムなどいずれも忘れがたい。二日目の深夜には学生だけで討論を行った。わずか一日前に知りあったのに年来の友であるかのように感じられる新しい友人との共感に満ちた話合いの中で私は自分自身の生の充足を感じた。

学問することの素晴らしさ、厳しさをつくづく感じながら私は八王子の山を降りた。このセミナーで私の長年のテーマである西洋と日本という問題に新たな視点を加えることができた。私の中に種はまかれた。この種を育てようという意欲がわきおこるのを感じた。

9月、ご病気で出席なされなかった大塚先生をお迎えしてリユニオン・セミナーが開かれた。大塚先生は学生一人一人の顔を見渡すようにされながら、穏やかに、しかし時に熱っぽい口調で説得力のある話を展開され、私達に強い感銘を与えた。夜は再び深夜に及ぶ討論。翌朝八王子のすがすがしい秋の朝の中に立って、私はここで得た友情がこれからの私にとって、大きな支えになることを確信していた。

（東京大学2年）

＊　＊　＊

●事業部だより

＜8・9月の利用状況＞

国際的な会議・研修会・語学研修グループの利用で賑わう

8月は例年のとおり、夏休みを利用した国際会議、語学集中研修等で賑わい、諸外国の学生と日本人学生との国際交流が盛んに行われた。

9月に入ると夏休み終了を待たずに勉強する各大学のゼミがふえ、当ハウスの常態に戻った。

●8・9月の利用状況を数字で示すと、8月はゼミ回数八六、宿泊延人数五、三二四人、9月はゼミ回数一〇九、宿泊延人数四、六七三人となる。

●8月は学生たちによる二つの国際会議で始まった。一つは7月25日から滞在中の第29回「日米学生会議」(八六名)、もう一つは4日から8日まで国際学生協会主催の第24回国際学生会議(一二一名)である。

「多様化する国際社会への対応」をテーマに開かれたこの国際学生会議には、フィジー、西サモアなど南太平洋地域の代表も含めた外国人学生四〇名の参加があった(日米学生会議は前号に既報)。ともに映画会やキャンプファイアなど、当ハウスの施設をフルに活用し、食事にも大満足して、会議の目的を十分に果したようである。

●すでに当ハウスの常連である英語教育協議会(ELEC)が、8月15日から七日間、全国の中学・高校教師八〇名を集めて一〇人の外国人講師から生きた英語を学び、引続いて、語学教育振興会(COLTD)四三名が一〇日間にわたるフランス語の集中研修を行った。いずれも宿泊をともなう語学集中研修として、クラスルームでの授業では期待できない効果をあげている。

●もう一つの特筆すべきグループは、国際商科大学の姉妹校ウィラメット大学日本研究グループ三一名で、9月2日から一六日間の日本語集中訓練を行った。これは、米国オレゴン州セーラムにある大学で、将来も定期的に来日の予定である。来日最初の二週間を当ハウスですごしたかれらは、グループ内の親睦を図ると共に、この期間当ハウスを利用した日本人学生と交わることができたことによって、よりよき日本理解の機会を与えられたことを喜んでいる。

●ユネスコ・アジア文化センター主催の第10回「アジア地域出版技術研修コース」が、今年は9月29日から3日間、当ハウスにおいて開催された。約一ヵ月間のコースのはじめに共同生活を通して効果をあげるためで、アジア地域一四ヵ国から二〇名が参加した。

当ハウスは29日に遠来荘でティ・セレモニー、30日夕食時には他の利用グループとの交歓会を開いて歓迎した。

相次ぐ国際的な会議やコースの連続で、当ハウスが日本人学生の国際理解にも役立っていることを見るのは楽しいことである。

●その他、この期間のトピックスとして、日本神経放射線研究会(一四二名)が「危険と安全—安全チェックのための管理機能—」をテーマに、8月21日から六日間の学会を開いた。同学会は記念として超大型スクリーンを寄贈された。また、第12回病院業務改善セミナーが順天堂大学のお世話で9月17・18両日、全国から一二〇名を集めて開催された。

●最近の利用状況の特徴の一つに協力会員校の事務職員の研修が盛んになったことがある。9月12～14日には、上智大学学務部職員四〇名が研修、ピタウ学長も出席され、飯田館長が昼食時に、デザートで歓待、歓迎のあいさつを行った。

＜キャンパス・トピックス＞

●原爆記念日——8月6日午前8時15分、構内放送で在泊者一同が黙禱、広島から来館した「文学教育研究集団」の会議の参加者、日信、脇田両氏が館長と共に「真理の鐘」を点鐘した。

●野外劇場の利用——全国自治体看護教育協議会(8月9～12日、八〇名)、千葉市幼稚園協会(8月9～11日、七五名)は、それぞれ歌や踊りの実習に野外劇場を活用した。

●講堂での映画会——前記、日米学生会議、国際学生会議の他、サンデー・ミーティング(英語会話グループ8月13～14日利用)は、滞在中に映画会を開催、日本文化の紹介や、外国事情に関するフィルムを映写した。

●天体望遠鏡の利用——9月18～22日来館の立教大学の三宅ゼミの指導教授前田愛先生は、先の宇宙をテーマにした共同セミナーで寄贈された天体望遠鏡を利用、学生と共に秋の夜空を楽しまれた。

＜館長招待朝食会＞

当ハウスを数多く利用される教授や遠来の賓客を、手あつくもてなしたいとの館長の気持から始められた館長招待朝食会は、この期間左のとおり開かれた。

○8月4日——松村康平教授(お茶の水女子大)、田中未来教授(白梅短大)

○8月18日——ロバート・バトラー教授他七名の外人講師(ELEC)

○8月21日——石坂巌教授(慶応大)

○8月27日——福井芳男教授(東大)、都留伸子講師(国立東京病院看護学校)

○9月1日——原一雄、星野命両教授(ICU)

9月2日——小泉一郎、児玉久雄両教授(学習院大)

○9月6日——安藤英治教授(成蹊大)、荒井良雄教授(学習院大)、横田洋三準教授(ICU)、志賀英教授(日本女大)

○9月8日——山梨英和短大教授六名

○9月10日——R・A・ヨーカム教授夫妻(ウィラメット大)

○9月14日——田内幸一教授(一橋大)

○9月22日——大東百合子教授(津田塾大)、三宅義夫、前田愛両教授(立教大)

○9月25日——リユニオン・セミナー運営委員、岡宏子教授(聖心女大)、山岸健教授(慶応大)

＜交歓会寸描＞

○8月31日——夕食時、六グループ二三〇名参加、ICUと横浜国立大の学生合唱など。

○9月5日——ウィラメット大学グループの歓迎を兼ねて開催、九グループ一六〇名参加。

○9月30日——ユネスコの出版専門コース参加者歓迎の交歓会として、八グループ一八五名参加。学習院大の荒井良雄教授および館長の英語によるスピーチ、各国代表の歌などで交流。

この交歓会は、主として夕食の限られた時間に開催しているが、52年4月以降の六ヵ月間に、通算八回、六三グループ、四〇大学から一、四五二名が参加した。

＜季節の行事＞

○9月27日——上智大学蟻山ゼミなど四グループ計八七名に、お月見のダンゴを供し、仲秋の名月を鑑賞した。

●館長日記から

◆立冬が過ぎて、多摩の丘は冬枯れの風景に変っていく。四季の別なく、この丘の風景を美しくしているのは、若者が友情讃歌の声をこだますからであろう。◆日展招待日に上野へ行った。その日にビカソ展を見ることができたのも幸いであった。私は共同セミナーの主題をつけることに苦労しているので、いつの頃からか、主題に関心を持つようになった。意欲的な作品であればあるほど主題がひときわ新鮮である。共同セミナーの企画もまた同様である。◆11月1日、明治学院創立百周年記念式に出席した。プレスビテリヤン教派の創立になる学校らしくいかにも簡素な式典である。ハレルヤが力強く歌われた。いただいた百年史は文明開化にキリスト教が影響した史実を述べている。多くの私学が外観が立派になる変身の過程で、伝統の精神を失っていくが、明治学院だけは例外であってほしい。◆「大学セミナー・ハウスと三千万円」という秘話を披露することにする。昭和42年11月29日、松下電器産業会長松下幸之助氏を寄付依頼のために訪問した。同行したのは茅、大浜、増田の三先生であった。現在の松下館（教師館）は、そのときに功を奏した三千万円の寄付によるものである。◆11月4日、私は茅事務所にいた。そこにキリンビールの秘書課から、三千万円寄付の内報をうけた。欣喜雀躍して私は茅先生の手を握った。◆11月15日、三菱綜合研究所社長中島正樹氏から電話をいただいた。「飯田さん、おめでとう、只今キリンビールの佐藤社長から連絡がありました。常務会で、あなたのところに三千万円寄付することを決定したそうです」との緊急情報であった。私は仲介の労をとって下さった中島さんの次元の高い協力の精神に敬意を表した。喜びを満面にしていた私を中島さんは電話口で想像されたに違いない。◆この丘を楽しい広場にしたいというのが創立以来の方向である。前号で山内恭彦先生が、学生生活にもう少し心のゆとりがほしい。ハウスでもこんなことを考えてみたらどうかと提案されている。三千万円の寄付は交友館の建築資金となり、出会いと交歓のホールになる。三億円が不正と化する現代において、三千万円の効用は今日的課題となるであろう。用い方によって金銭は永遠の財宝である。◆中島正樹氏が東工大教授永井道雄氏の勧めによって、視察のため来館されたのは昭和45年8月22日であった。三千万円は人と人との結びつきが演出した善意の業である。来賓署名簿に中島さんの感想が記されている。毛筆の香りが高い。

風ひかるセミナーハウスの丘の上
こころも共に透き徹るがに

●利用状況

＊＝同月2回利用

8月＝五、三二四人
9月＝四、六七三人

■8月

東京学芸大学助教授　小川　仁
工学院大学講師　南迫　哲也
東京農業大学教授　西郷　光彦
お茶の水女子大教授　松村　康平
武蔵大学教授　横山　定雄
法政大学助教授　高橋　和之
東京都立大学助手　永田　茂
東京大学民事法研究会
明治学院大学助教授　橋本　敏雄
明治学院大学マスコミ研究会
東京工業大学助手　近江　政雄
駒沢大学助教授　百済　勇
東京学芸大学教授　古谷　庫造
慶応義塾大学教授＊　加藤　寛
法政大学講師　大石慎三郎
工学院大学助教授　須田精二郎
立教大学教授　守屋　省吾
東京都立大学教授　桐敷真次郎
慶応義塾大学講師　永安　正博
お茶の水女子大教授　澤島　侑子
法政大学教授　西川大二郎
東京都立大学助教授　池内　紀
上智大学助教授　ザビエル・ガラルダ
法政大学教授　土生　長穂
東京大学助手　渡辺　俊一
明治学院大学教授　高野　史郎
東京都立大学教授　長倉　康彦
上智大学講師　渡部　清
明治大学教授　小松　俊雄
東京慈恵会医科大学　船橋　知也
東京大学助教授　兵藤　釗
東京都立大学助教授　桐谷　維
東京学芸大学教授　角尾　稔
東京工業大学教授　末松　安晴
東京都立大学助教授　小西　悟
慶応義塾大学教授　石坂　巌
東洋大学教授　菅沼　晃
お茶の水女子大教授　吉田　昇
杉野女子大学短期大学部教授
田村　皖司
東京大学教授　城塚　登
神奈川大学講師　橋本　侃
横浜国立大学講師　青柳　肇
国際基督教大学教授　井上　和子
千葉商科大学教授　矢澤　秀雄
早稲田大学助教授　由井　正臣
法政大学教授　大谷禎之介
東京大学助教授　長尾　龍一
千葉大学教授　井上　勝也
都立八王子養護学校
都立立川高校
東京スクール・オブ・ビジネス
第29回日米学生会議
第24回国際学生会議（日本国際学生協会）
鶴川高等学校
日本金融論研究会
日本神経放射線研究会
日本建築学会関東支部
東電学園大学部
同人新理想社
文学教育研究者集団
千葉市幼稚園協会
全国自治体看護学校教育協議会
東京第一バプテスト教会
サンデー・ミーティング
東京都高等学校英語研究会
きさらぎ・グループ
英語教育協議会（ELEC）
埼玉県都市政策研究会
国立東京病院看護学校
語学教育振興会（COLTD）
日本化薬
町田市役所
立川スプリング

【個人利用】

東北大学　佐藤　匡
日本大学学生　江藤　隆信
日本大学学生　七條　充弦
白梅学園短期大教授　田中　未来
千葉県庁　小路　隆生
慶応義塾大学教授　千住　鎮雄
東洋大学助教授＊　三浦　安子
東京都立大学助手　原　坦
法政大学教授　西川大二郎
杏林大学学生　河内　清
杏林大学学生　比嘉　良博
馬橋キリスト教会　島　清美

■9月

横浜国立大学助教授　有光　友学
国際基督教大学教授　原　一雄
東京都立大学助教授　太田　誠
日本大学教授　瀬川　渡
学習院大学教授　小泉　一郎
学習院大学教授　児玉　久雄
東京都立大学教授　城座　和夫
東京大学助教授　虫明　功臣
中央大学教授　山下　幸夫
学習院大学教授　大野　晋
東京薬科大学助教授　山川　敏郎
東京家政大助教授＊　橋口　英俊
東京都立大学助教授　日丸　哲也

中央大学助手 河原 厳
法政大学助教授 公文 溥
日本女子大学助教授 志賀 英
成蹊大学教授 安藤 英治
横浜国立大学助教授 関口 隆
学習院大学教授 荒井 良雄
東京大学教授 高橋 徹
国際基督教大準教授 横田 洋三
慶応義塾大学教授 十時 厳周
日本大学助教授 川端 逸典
慶応義塾大学講師 小此木政夫
中央大学助教授 林 正樹
法政大学教授 野田 正穂
日本大学講師 長谷川清之
東京経済大学助教授 佐藤 博
法政大学教授 安井 郁
東京薬科大学教授* 川瀬 清
早稲田大学教授 伊東 克己
早稲田大学教授 深沢 実
早稲田大学教授 福山 仙樹
一橋大学教授 田内 幸一
青山学院大学教授 J・E・ランデス
法政大学助教授 生垣 昌之
上智大学学務部 津田塾大学助教授 金谷 展雄
立教大学教授 茂木 虎雄
一橋大学教授 岡山 誠司
早稲田大学竹中育英奨学生の会 酒巻 俊雄
早稲田大学教授 大友 賢二
神奈川大学助教授 三浦 孝司
神奈川大学助教授 三浦 武
津田塾大学英語研究会 河村 望
成蹊大学教授* 宇野 重昭
津田塾大学助教授 千葉 修司
早稲田大学教授 宮坂富之助
早稲田大学教授 清水 望
法政大学教授 増島 宏
早稲田大学教授 桜井 孝一
東京都立大学教授 古屋野正伍
早稲田大学講師 北野 弘久
順天堂大学教授 小酒井 望
中央大学助教授 石崎 忠司
津田塾大学教授* 大東百合子
明治大学教授 原 正彦
津田塾大学助教授* 矢澤修二郎
立教大学教授 前田 愛
立教大学教授 三宅 義夫
早稲田大学戸沼研究会 井関 昇
津田塾大学助教授 木村 康雄
立教大学教授 板橋インマヌエル教会 伊藤 明子
東京都立大学教授 三浦 武
東京都立大学助教授 河村 望
青山学院大学教授 深沢 実
横浜国立大学助教授 佐々木弘明
駒沢大学教授 斉藤 寿
東京大学教授 斎藤 眞
駒沢大学講師 谷敷 正光
東京学芸大学教授 関 四郎
東京学芸大学助教授 山口登志子
上智大学教授 蠟山 道雄
東京学芸大学教授 抽切 由夫
東海大学教授 藤家禮之助
東京女子大学人形劇研究会 森井 眞
明治学院大学教授 F・ペレス
上智大学教授 佐野雄一郎
産業能率短期大講師 和田 明子
都留文科大学助教授 高村 弘毅
立正大学助教授 小菅 東洋
山梨英和短期大教授 中島 盛夫
横浜市立大学教授 中村 禎里
立正大学教授 井関 昇
東京電機大学教授 木村 康雄
都立商科短期大教授 伊藤 明子
ウィラメット大学日本研究ゼミナール
私大教授会関東協議会
シャロームICYEリユニオン
第91回共同セミナーリユニオン・セミナー
第6回若手研究者問題全国シンポジウム実行委員会
日本キリスト教会東京中会
日本基督教団中渋谷教会
日本電信電話公社武蔵野電気通信所
伊勢丹プチモンド
京王プラザホテル*
日本化薬
市光工業
多摩市役所
【個人利用】
中渋谷教会 三沢八重子
津田塾大学助教授 三浦 永光
大阪経済大学助手 山田 文明
野村総合研究所 山田 善靖
東洋大学講師 村松 友次

■編集後記

この9月に、何気なく講師控室で本紙を手にされたというK大学のN氏から、「こうしたパンフレット類には今まで感じたことのない新鮮な何とも言えない暖かみのある、ある美しいものを見たような気が致しました」という手紙をいただいた。考えてみれば、このキャンパスほど美しいニュースの素材に恵まれているところはないのかもしれない。

本号では「新入生が『学生となる』ための条件とは」と題して特集記事を組んだ。学生が学生たり得るために、大学がなさねばならないことは多いであろう。多摩の丘を舞台にして行われている教育活動の中から掘りおこしてみたのが、新入生を迎え入れる大学側の対応策であった。それは同時に当ハウスの役割を再確認することでもあった。 (能)

山岸 健著
社会的世界の探究 ―社会学の視野― 四六〇〇円 (〒二四〇)

宮家 準著
日本宗教の構造 二〇〇〇円 (〒二〇〇)

H・アルバート著 仲 康 他訳
デュルケームと社会学 一五〇〇円 (〒一六〇)

石川忠雄著
私の見た日本外交 一〇〇〇円 (〒一六〇)

堀江湛・岩男寿美子編著
都民の選択 ―参院選の意識調査― 二五〇〇円 (〒一六〇)

徳田教之著
毛沢東主義の政治力学 二八〇〇円 (〒二〇〇)

福沢諭吉著・富田正文校注
福翁自伝 当用漢字 現代かな 五五〇円 (〒一六〇)

伊藤正雄著
口訳 評注 文明論之概略 〈今も鳴る明治先覚者の警鐘〉 二八〇〇円 (〒二〇〇)

桑原三郎著
赤い鳥の時代 〈大正の児童文学〉 二八〇〇円 (〒二〇〇)

東京港区三田2－19－30
振替東京9－155497
慶応通信